

就職したら
異世界に派遣されました。

ヴィーズ

珊瑚色の体をもつドラゴン。
突然トゥーリ近くの湖に現れ、
住民たちから恐れられる。

アレッジ

異門管理協会トゥーリ支部の長。
深夕に冷たく接するが、
その態度の裏に隠された
真意とは――？

ベルディード

アレッジの部下。
穏やかな性格で、深夕にも
優しく接する。

バルフェ

食堂の娘。
人形のように整った顔をした
明るく親切な女の子。深夕と
出会い、すぐ友だちになった。

サフィール

オーパーツを専門とする考古学者。
ひどい方向音痴の上、
辛い物を食べて火を吹くという
物騒な特技を持つ。

チドリ

人間の言葉を話す鳥。
おしゃべりで陽気。渡り人である
深夕によく知っている。

ラダ・バスタリア

雑貨屋の店主。
住み込みで働くことになった深夕を、
ハリセン片手に厳しく指導する。

倉橋深夕

18歳。家庭の事情で大学進学を諦め、
異門管理協会という怪しげな団体に
就職した。「渡り人」として異世界の町
トゥーリへ行き、雑貨屋で働くことに。



目次

| | | |
|-------|--------------------------|-----|
| プロローグ | 異門管理協会 | 7 |
| 第一章 | おばあちゃんの肉じゃが | 26 |
| 第二章 | 風変わりのオーパーツ | 73 |
| 第三章 | ドラゴン清掃 | 122 |
| 第四章 | 無償労働とその対価 (前) | 163 |
| 第五章 | 無償労働とその対価 (後) | 217 |
| 第六章 | 黄昏の町 <small>たそがれ</small> | 256 |

プロローグ 異門管理協会

『誠に残念ながら、今回は貴意きいに添えない結果となりました』

期待を込めて封筒から取り出した就職試験の選考結果。その無慈悲むじひな内容に、倉橋深夕くらはしみゆうは息を吸い込んで布団の上に飛び込んだ。

「もうやだー！」

力いっぱい叫び、ゴロゴロと布団の上を転がる。

「なんなの？ なんでこんなに次から次へと落ちるの!? 私って不採用通知もらう才能でもあるの？ やだ、そんなのいらなから内定通知くーだーさーい！」

時刻は午後二時。母親が買物に出かけているため、家の中には自分以外誰もいない。だから深夕は心ゆくまで不満をぶちまけていた。声が天井に当たって空気を震わせる。

「大体何よ、『誠に残念ながら』って。どうせ全然残念じゃないくせに！」

深夕は面接の時に見かけた社長や専務をハゲだのビール腹だのとひとしきり罵ののしった後、選考結果を読み返した。だが、何度読み返してもそれが内定通知に変わることはない。

(これで何回目だろ……。二十五？ 六だっけ？ 忘れたけど、多分そのぐらいだよ)

連日のように届く不採用通知。最初こそ笑って済ませていたが、ここまで採用を断られると笑う余裕もなくなってくる。

(なんだか、世界中の人たちから否定されてる気分)

深夕には時間がないのだ。もう高校三年生、それもあと十日で卒業式を迎えるというのに、まだ就職先が決まっていない。焦りも加わって自分自身への失望感が倍増していた。

(誰よ、こんな時期に就職活動しろなんて言ったのは！)

「私だよ馬鹿！」

心の声に自分でツツコミを入れ、勢いよく起き上がる。それから枕を掴んで胸元に引き寄せ、顔を押し付けた。泣きそうになるのを必死に堪える。

(そうよ、就職するって決めたのは私なんだから諦めちゃ駄目だ)

どれだけ困難でも、自分は絶対に就職しなければならない。

(……しつかりしなきゃ)

深呼吸で気持ちを落ち着かせ、深夕は立ち上がる。そして不採用通知を学生鞆かばんの中に突っ込んだ。学生服に着替えた後、洗面所へ向かう。背中まで伸びた髪をヘアゴムで一つに結び終えた頃には、気分もしゃっきりしてきた。

鏡の中にいる自分を見つめ、おかしなところがないか確認する。紺かみのブレザーにスカート、赤いリボン。学校指定の制服に身を包む、平凡な顔の少女がそこに映っていた。

(もうちょっと可愛ければ、内定も取りやすいのかなあ)

ついそんなことを考えてしまい、深夕は慌てて首を振る。

「落ちたものは仕方ない。次行くよ、次」

今ならまだハローワークも開いている。いつも相談に乗ってくれる職員にまた来たのかと呆れられそうだが、他に頼れる場所はない。

そう割り切り、深夕は薄い学生鞆かばんの手にハローワークへ向かった。

少し前まで、深夕は自由登校期間を悠々ゆゆう自適じじきに過ごすだけの、気楽な身の上であった。大学入試に合格し、春からは私立大学の医学部に特待生として通うことが決まっていたのだ。

それが今や、不採用通知に埋もれる日々。こんなことになってしまったのは、ひとえに家が貧乏であるせいだ。事業に失敗した父親は心労がたたって倒れたきり、今も入院生活を送っていた。

いくらお金がなくても、子どもが深夕一人であれば問題ない。特待生なので大学の学費を払う必要はないからだ。しかし、深夕の家は子たくさんなのである。兄弟は全部で七人。深夕はその中で最年長だった。

(それでも、私は楽な方だと思ってた)

ハローワークに向かう道すがら、深夕は自転車漕ぎつつ胸中で呟く。そう、確かに貧乏大家族の長女にしては、お気楽な身の上だった。

本当なら、長女の自分が働いて家計を支えなくてはいけない。それなのに大学進学を希望できたのは、一つ年下の弟・有紀ゆきのおかげだ。彼は高校卒業後、就職して家計を支えると言ってくれた。

だから深夕は部活にも入らず、家事と勉強に専念し続けてきたのだ。特待生として大学に入学し、いずれは医者となって家族に榮をさせるために。おかげで友達は一人もできなかった。

そこまでののに、深夕は一番大事なことを見落としていた。有紀の本心だ。
(まさか有紀が進学したがってたなんて、ちつとも知らなかった)

それを知ったのは、一月の半ばのことだ。

洗濯物を仕舞おうと箆筒を開けた時、有紀の服が入っている場所で、とある芸術大学のパンフレットを見つけてしまったのだ。驚いた深夕が問い詰めると、彼は美術修復家になりたいのだと渋々話してくれた。その後に放たれた彼の言葉が、今も頭から離れない。

『姉ちゃんはいいよな、好きな風に生きられて!』

家中に響き渡った、血を吐くような叫び。それは有紀が家族のため、今までずっとやりたいことを我慢してきた証拠だった。そして彼にそんな我慢を強いたのは、他ならぬ深夕である。

(あの時、決めたの。絶対に就職して、有紀を大学に行かせてあげるんだって)

自分が入学する予定の大学に辞退を申し入れたのは、翌日のことだ。その日から、胃の痛くなるような就職活動が始まった――

だが、いくら強い気持ちがあっても、現実の厳しさは変わらない。

「毎日ご苦労様だね、倉橋さん。でも新しい求人なんて、そう毎日毎日入らないよ。今ある求人は、あらかた受けちゃったでしょ」

ハローワークの受付カウンターにいた中年女性の呆れ顔に、深夕はむっとする。江東というその職員には、初めてハローワークに来た時からお世話になっていた。名札には課長と書いてある。

「そうは言っても、卒業まで時間がないんです。受けられるところは片っ端から受けないと!」

カウンターに両手をつき、江東をまっすぐに見据えて訴える。江東はしばし沈黙した後で盛大にため息をつき、神妙な顔で深夕を手招きした。

「ちよつとこつちに來なさい」

深夕が訝しがりながらもついていくと、なぜか相談窓口を通り越して面談室に通されてしまった。こぢんまりとした四角い部屋に電気をつけ、江東はパイプ椅子に腰掛ける。深夕も向かい側の椅子に腰掛けると、江東がお互いの間にある机に両肘をついた。

「毎日頑張ってるようだけど、倉橋さんはどうしても就職したいの? そのためなら、業種や職種は選ばない? 辛くても我慢できる?」

唐突に問われ、深夕は一も二もなく頷いた。

「はい。家族のために、お金を稼がなきゃいけないんです」

深夕の答えを聞いて、江東が目蓋を閉じる。ややあって、彼女はおもむろに立ち上がった。

「なら、紹介できる求人が一つだけあるわ。少し待っていて」

そう言って面談室から出ていき、時間を置かずに戻ってくる。そして大きな紙を、こちらに差し出してきた。

「これ、求人票ですか? えーっと、非営利法人異門管理協会? ……胡散臭い名前ですね」

よくハローワークに受理されたものだと思うぐらいに怪しい。だが——
「月給五十万!? な、なんですかこれ。すごいお給料じゃないですか!」

給与の欄を見て、深夕は悲鳴に近い声を上げた。

実は桁が一つ少ないというオチじゃないのか。深夕は自分の目を疑って求人票を凝視するが、何度見ても月給五十万と書かれていた。見間違いではない。

(で、でもでも! こんなにお給料が高いってことは、死ぬほど働かされるんじゃない?)

そう思い、勤務時間や休日といった待遇面をすみずみまで見て、深夕は口をあぐりと開けた。
「昇給もボーナスも退職金もあるし、八時間勤務で週休二日制……しかも正社員」

思っていた以上の好条件だ。深夕は頬を紅潮させ、目を輝かせながら江東の手を握りしめる。

「あ、っ、本当に私なんかを受けてもいいんですか!」

「受けるのはいいけど、もう少し慎重に読みなさい。特にほら、ここ」

江東が仕事内容の欄を指さす。そこには、法人名と同様に見慣れない言葉が並んでいた。

「異門に関する調査研究?」

「よくわからないけど、何かの研究のために調査員を募集しているらしいわ。詳しいことは面接の時に、直接話してもらえそうよ」

「はあ、そうなんですか……。それにしても、こんな求人初めて見ました」

「この求人、上からの命令で完全非公開なもの。課長以上の職員でないと紹介できないの。こんな異例中の異例よ。……どう? そんな求人でも受けてみる?」

上というのは、国のことだろうか。ますます怪しいが、これ以上の好条件はないだろう。

「もちろん受けます!」

何より月給五十万を逃す手はない。即決した深夕に、江東が口元を綻ばせた。

「そう言うと思ったから、先方にはもう連絡しておいたわ。はい、紹介状。明日の十時に駅前の喫茶店で会いたいですって。履歴書はちゃんと持って行ってね」

深夕は頷き、紹介状を学生靴に仕舞い込んで、深く頭を下げる。

「貴重な求人をご紹介いただき、ありがとうございます。今度こそ絶対受かってみせます!」

「そうしてほしいわ。これに落ちたら、もう後がないからね」

「うっ……、頑張ります」

プレッシャーに胃痛を覚える。深夕はもう一度江東にお礼を言って、ハローワークを後にした。

(ここ、だよね)

翌日、深夕は指定された時間より少し早めに、駅前の喫茶店にやってきた。靴の中には、昨夜家族が寝静まってから書き上げた履歴書が入っている。深夕は緊張しつつ、喫茶店のドアを開けた。

ドアベルの軽やかな音を聞きながら中に入った深夕を、店員が奥へ案内してくれる。ついていくと、一番奥の席に二人の人物が座っているのが見えた。老年の男と、三十手前くらいの女。彼らは深夕に気付いて立ち上がる。周りに他の客はいなかった。

(あの人たちが、今日の面接官……)

ドキドキしながら彼らの前に立つと、女の方が声を掛けてきた。

「あなたが倉橋深夕さんですね」

「はい、そうです」

しっかりと化粧の施された顔は、見るからにキャリアウーマンという感じだ。厳しそうな人だと思つてますます緊張する深夕に、老年の男が朗らかに笑いかけた。

「まあ、そう固くならず。私は下藤、彼女は佐伯といいます。今日はどうぞよろしく」

「はい。どうぞよろしくお願いします」

行儀よく頭を下げ、二人に促されて椅子に腰掛ける。すると、店員が珈琲を二つとオレンジジュースを一つ運んできた。予め注文してくれていたのだろう。二人に礼を言うと、彼らは早速話を切り出してきた。

「さて、求人票を見て応募してくださいでしたが、研究職に興味がおありかな？」

下藤の問いに「いえ」と首を振りかけ、深夕はすぐに思いとどまる。はつきり言つて興味はないが、正直に言つてしまつたら間違いなく不採用だ。だから言葉を選び、慎重に答える。

「……仕事内容に興味があります。どういったものなのか、まるで見当がつかなかったので」

本当は仕事内容だけでなく、法人名の由来や、驚くほど高給である理由も気になっている。だが、気になる点を挙げるときりがないのでやめておいた。

「それはそうですね。佐伯さん、協会について詳しく説明して差し上げなさい」

下藤に促され、佐伯が協会について説明を始める。

「我々異門管理協会は、その名のとおり異門——異世界に通じる門を管理しています。今回求人を出したのは、その門の向こう側を調査するためです」

深夕は求人票を見た時と同じ怪しさを感じた。カルト教団の信者と相対している気分さえなつてくる。

（どうしよう、この会社すつごく胡散臭い。このままだと、そのうち教祖様が出てきて無理やり入らされた挙句、お布施を払わされるかも。そうなる前に、仏教徒なので……とか言つて逃げた方がいいのかな）

「おや、まるでオカルト話を聞かされたような顔をしておいでだ」

下藤に猜疑心を見透かされ、深夕ははっと息を呑んだ。

「すみません。少し驚いてしまいました」

怪しいと思つても、顔に出すのは失礼だ。だから謝ると、佐伯がうんうんと頷いた。

「そうですね。私も昔はそうでした。しかし、異門もその先にある異世界も、現実には存在しているんですよ。それも一つではなく、いくつもの異世界が……公表されてはいませんが」

「どうして公表されていないんですか？」

「異門や異世界については、まだまだわからないことが多すぎますよ。そんな段階で公表しても不安を煽るだけです、悪い輩に狙われると厄介でしょう？」

（そういうえば江東さんも、求人は上からの命令で非公開にしてるって言つてたっけ）

今いる世界と異なる世界を繋ぐ門が存在するなんて、にわかには信じがたい話だ。だが、もし仮

にこの話が真実だった場合、それを誰かに狙われたら困るといのは納得できた。この世界にはない技術を持って帰られて、戦争やテロに利用されては大変だ。

佐伯が真剣な顔で言う。

「だからこそ異門は厳重に管理されているんです。こちら側でも、あちら側でも」

「あちら側？」

頭の上に疑問符を浮かべた深夕の問いに、今度は下藤が答える。

「異門の向こう側——異世界にも、異門管理協会があるんですよ。だから我々は門が開いている間に異世界と交信し、時には向こうへ渡って調査研究に励んできた。そのための調査員を、我々は渡り人と呼んでいます」

そこまで聞いて、深夕はようやく合点がいった。

「今回の求人、その渡り人を募集しているんですね」

「そうです。……まだわからないことだらけでしょうが、ひとまず今回の任務についての詳しい内容をお伝えしましょう。面接を続けるかどうかは、その上であなたが決めてください」

怪しい世界に片足を突っ込んでしまい、帰りたい気持ちで一杯だったが、もう後には引けない。

佐伯も下藤も、真剣そのものの顔をしている。異世界などあるわけがないと疑っていた深夕も、そんな二人の表情に釣られ、異世界の存在を信じ始めていた。

深夕が頷くと、佐伯が微笑み、任務の説明に入った。

「今回渡り人になる方には、ある世界に渡ってしばらく滞在してもらいます。その世界には以前に

も渡り人が滞在していますが、門が開いてから閉じるまでの、ごく短期間でした。今回の調査は門が開いて一度閉じた後、再び開くまでの長期間になる予定です」

長期間。その言葉を聞いて、深夕は不安になった。

「その門はどのぐらいの周期で開くんですか？」

「こちらの世界の感覚だと、一年に一度——門の向こうの世界の感覚では二年に一度ですね。あちらとこちらでは時間の流れが違いますから」

「二年……っ!? 長いですね」

それほどの年月を一体何に費やすのか訊こうとしたら、先に佐伯が教えてくれた。

「調査自体は難しいものではありません。滞在して、その世界の文明や文化を体験してきてもらいたいんです。外国に留学するようなものだと思います」

「本当にただ滞在するだけなんですか？」

「はい。今回の調査の目的は、民衆の日常生活を知ることですから」

異世界の調査というからには、難しいことを要求されるものと思っていたが、どうやら違うらしい。深夕がほっと胸を撫で下ろすと、下藤が補足説明をする。

「二年の調査期間を終えたらレポートを提出していただき、協会支部で一年ほど事務仕事に就いてもらいます。こちらの世界の常識や感覚を取り戻すための、リハビリと考えてください。その後は渡り人と事務員、どちらか希望する部署に配属されることとなります」

「渡り人を選択する人もいるんですね」

「ええ。事務員より賃金が高いですし、デスクワークより気楽でいいと言う人もいます。もちろん、気楽とはいえ渡り人にも仕事をすることで規則や制約はありますよ。例えば協会や異門については家族にも話してはいけません。向こうの世界の人に話すのも禁止です。滞在中、渡り人には地球人であることを隠して生活してもらいます」

あくまでも素性を隠しての調査活動になるらしい。深夕は不安を隠せず、眉尻を下げた。

「異世界では、向こうの世界の協会にお世話になるでしょうか」

そうでなければ、いきなり異世界に放り込まれて生きていける気がしない。

「いいえ。今回は別の滞在先を用意してあります。そこで事情を知る現地人と共に暮らしていただく予定です。周囲へのカムフラージュのため、滞在先では別の仕事をしてもらうことになります」

カムフラージュについては納得した深夕だが、当の滞在先とやらが気にかかる。

「あの、滞在先ってどんなところなんでしょうか」

おずおずと尋ねた深夕に、下藤が柔和な笑みを深めた。

「向こうの協会からは雑貨屋だと聞いています。ああ、そうそう。求人票に書いてある給与の他に、雑貨屋で働いた分のお金も支給されるそうです。そちらは雑貨屋の主人から手渡しされることになっていますよ」

「えっ？ 本当ですか!？」

それって、とんでもない好条件じゃなからうか。

気持ちが生つきそうになる深夕だったが、ふとあることに気付いて視線を落とした。

「あ……でもそれって、異世界のお金なんですよ。それじゃあ、こっちで使えません」

外国の通貨なら円に交換することができるが、異世界の通貨はどうにもならない。

「それについてもご心配なく。こちらの世界に持ち帰っていただければ、一定のレートで円に交換しますよ。大体一ヶ月で二十万円ほどにはなるはずですよ。……以上で任務についての説明は終わりますが、面接を続けてもよろしいですか?」

五十万円、足すことの二十万円。深夕は思わず音を立てて椅子から立ち上がった。

「是非お願いします!」

うまい話には裏がある。そんな言葉が頭に浮かんだが、この話を逃す手はない。

「そうですか、それはよかったです」

下藤と佐伯が微笑み、それを見て深夕は着席する。

そこからは和やかな雰囲気ですべて進んでいったため、深夕は緊張することなく、問われるまま志望動機などを答えた。

そして翌々日。深夕はついに、念願の内定通知書を手に入れたのだ。

家族に海外で働くことになったと嘘の説明をしたり、入社に必要な書類を協会とやり取りしたりしていたら、卒業式を迎えるのはあつという間だった。

特に大変だったのが、有紀の説得である。彼は母親と一緒に何度も考え直せと言ってきたが、深夕は頑として首を縦に振らなかった。最終的には自分の通帳を彼に強引に渡し、給与が毎月振り込

まれるから必要な時に使えと言い含めて話を終わらせたのだ。

卒業式を終えた深夕は、クラスメイトが卒業パーティーを聞くという話を適当に聞き流し、早々に学校を出る。一度家に戻った後、駅前で佐伯と合流することになっていたので。

「深夕、くれぐれも気をつけてね。生水は絶対飲んじゃ駄目よ」

涙ぐむ母親の横から、弟妹たちがひよっこり顔を出す。

「ねーちゃん、お土産買ってきてねー！」

「お菓子がいいー！」

「はいはい。余裕があったらね」

外国に行くと話した時こそ泣き喚いていた彼らだが、今ではほろつとしたものだ。対する母親は一応納得してくれたものの、時間が経つにつれて不安が増したのか、心配そうにしている。

母親に向けて大丈夫という風に手を振る深夕の前に、それまで黙っていた有紀が一步進み出る。

彼の顔には、不満がありありと浮かんでいた。

「本当に行くのかよ」

「何よ今更。大丈夫、一年したら帰ってくるから」

「でも、俺のせいで姉ちゃんが出ていくなんて……本当にごめん」

「まだそんなこと気にしてたの？」

唇を噛みしめて俯く有紀を、深夕は笑って抱きしめた。

「謝らないで、胸張って。有紀はなんにも悪いことしてないんだから。それより私のお金無駄にし

ないように、しっかり勉強してよね。無駄遣いもしちゃ駄目よ」

せっかく自分が異世界にまで出稼ぎに行くのだから、有紀には志望校に合格してもらいたい。笑いながらも釘を刺すと、有紀は押し黙った後で小さく頷いた。

「……わかったよ」

これならもう大丈夫だろう。深夕は有紀から体を離す。

あまり長居をすると辛くなるので、深夕は弟妹たちの頭を撫でてから、すぐに背を向けた。

「じゃあ、行ってきます」

キャリアバッグをガラガラと転がし、やってきたタクシーに乗り込む。キャリアバッグはこの日のために、協会から渡された支度金で買ったものだった。

タクシーは十分程度で駅前に到着した。今日もピシッとスーツを着こなした佐伯が立っており、手招きしてくる。

「卒業おめでとう、倉橋さん」

「ありがとうございます」

簡単に挨拶を済ませ、佐伯と共に駅舎の中に入る。深夕がぐるぐる門は少し離れた街にある協会支部の中らしく、佐伯がそこまで案内してくれることになっていた。

三十分ほど電車で揺られ、更に十五分ほどタクシーに乗った後、深夕たちはようやく異門管理協会の支部に到着した。無言でそれを眺める深夕を見て、佐伯がぐすくすと笑う。

「意外と普通でしょう？」

目の前には、六階建てでガラス張りの、お洒落なビルが立っていた。とても胡散臭い団体の事務所が入っているようには見えない。もちろん、門がありそうにも見えなかった。

ビルは一棟すべて協会のもので、他の会社は入っていないという。佐伯は何ら手続きすることなく受付を通り過ぎた。深夕はこのまま門まで連れて行かれることになっている。

(入社式も何もなしにいきなり異世界に飛び込むって、よく考えなくてもすごいよね)

入社式があってもなくても、異世界に行くなんてとんでもないことだが、研修としてほとんどなかったし、何もかも今更だ。

異門の管理をしているだけあって、内部の警備は厳重だった。警備員がそこかしこにいるだけでなく、ドアをくぐるたびに異なるIDカードが必要らしい。やがてカードだけではなく、指紋認証や声紋認証まで求められるようになった。

そうして奥へ進んでいくと、最後に重厚な扉が待っていた。銀行の金庫にあるような、暗証番号を入力したり指紋認証をしたりした後、更に取っ手をぐるぐる回さなければ開かない扉だ。

「この先に門があるの」

佐伯がそう説明し、力を込めて取っ手を引っ張る。重苦しい音と共に開かれた扉の向こうには、冷えた空気が満ちていた。部屋の中央には巨大な門がある。

(一体何でできてるの？ 石？ 金属？ どっちも違うような気がするんだけど……)

佐伯に連れられて恐る恐る近づくと、門が更に大きく見えてくる。うっすらと光を纏った、どこか無骨な感じの門。パリの凱旋門を小さくしたような形である。薄暗がりの中で、漆黒のそれが艶

やかに光っていた。土台がついており、門に上がるための階段が設置されている。それらも門と同じ素材なのか、艶のある漆黒だ。

「あの、門の向こうが見えないんですけど」

普通の門であれば、向こう側の景色が見えるはずだ。だが、目の前の巨大な門には何も見えない。この部屋の壁さえも。

「今がちょうど開いている時期だもの。門は今、異世界に通じているの」

怖くなって訊いた深夕に佐伯が答える。それから彼女は辺りを見回し、深夕が行く世界にかつて渡り人として行ったという調査員を何人か紹介してくれた。

「大丈夫。文明レベルは地球より少し低いけど、普通に暮らす分には安全な場所だから」

「地球に似たところも結構多いですね。調査結果を期待していますよ」

調査員たちが口々にそう言い、深夕に握手を求めた。深夕がそれに「ありがとうございます」だの「わかりました」だのと答えていたら、下藤がやってきた。

「よくここまで来てくれました。門をくぐればその先は異世界です。驚くことも多いでしょうが、できるだけたくさんのお話を学んで帰ってきてくださいね」

「はい、頑張ります。……でも、向こうの世界のことをほとんど知らずに行くのは不安です」

簡単な説明は受けたし、もらった資料もキャリアバッグに入れてある。だが、ちゃんとした研修などは受けていないのだ。不安がる深夕の肩を佐伯が叩く。

「これまで、あまり調査が入っていない場所だもの。いつか、次の渡り人が同じ世界に行く時には、

あなたが教えてあげる側になるのよ」

(ううっ、他人事だと思つて気楽に言うよね。この人)

深夕が恨めしげに佐伯を見ていると、下藤が「最後に一つ」と告げる。

「渡り人には不思議な力が宿ると言われています。その力を活かすも殺すも君次第ですが、くれぐれも悪用はしないように」

「不思議な力？ それってなんなんですか？」

「魔力ですよ。渡り人には、魔力が宿るんです」

大声を上げかけ、深夕は慌てて手で口を押さえた。

(魔力ってファンタジー小説に出てくるような、魔法を使うためのあれ？)

最後の最後に信じられないことを告げられ、深夕は目を丸くする。そんな大事なことをどうして今更と文句を言いたくなつたが、それを制するように下藤は笑顔で言った。

「大丈夫ですよ。魔力が宿っても死にはしません。……さあ、そろそろ時間ですよ」

(いや、ちょっと待つてよ！そこは説明しようよ！)

だが、下藤は一切説明する気がないらしく、無言で微笑むばかりだ。おまけに佐伯に背中をぐいぐい押され、深夕は門の前に立たされた。

門の向こうに広がる漆黒の闇を見つめっていると、否応なく恐怖心を煽られ心拍数が上がる。だが、もう逃げられない。深夕は一度きつく目を閉じ、覚悟を決めて再び目を開けた。

「行つてらっしゃい。あちらに着いてからは、向こうの協会の指示に従ってください」

佐伯の言葉を聞いて、ふうっと息を吐き出し、階段に足をかける。一步一步踏み出すたびに、闇が濃密になつた。

やっぱ帰りたいたいと思つたものの、脳裏に浮かんだ家族の姿を励みに、深夕は前へと進んでいく。

「あ、そうだ。その前にこれを着けておかないと」

鞆かばんを探り、金色のイヤリングを取り出す。片耳用のそれはりんごをモチーフにしたもので、協会からの支給品だ。なんでも向こうの世界の人と話す時に、翻訳機の役目を果たしてくれるらしい。

門をくぐると、中はただの暗闇ではなく、あちらこちらでちかちかと光が明滅していた。その一つ一つが別々の世界に繋がっているのだと、深夕は協会から教わっている。

(ロマンチックだけど、ちょっと怖いかも)

周囲を見回していたら、一際大きな光があるのを見つけた。協会からは、門に入ったら一番大きな光を指すようにと言われている。恐らくあれが、目指すべき光だろう。

「急がなきゃ」

なぜかそんな気持ちになり、深夕はやや駆け足でその光を目指した。小さな光が、体を次々とすり抜けていく。その箇所が熱を帯び、そこから力が漲みなってくる。次第に全身が熱くなり、走る速度も上がつていった。

一番大きな光が近づいてくる。息を切らしながら駆け続け、深夕はようやく光と闇の世界を飛び出した。

第一章 おばあちゃんの肉じゃが

飛び出した先にあつたのは、森と泉に囲まれた美しい場所だった。辺りはとても明るく、ぽかぽかと暖かい。

どうやらこちらの世界の門は、外に置かれているらしかった。

走り続けていた深夕は呼吸を落ち着かせようと、門の前に立ったまま空を見上げる。鮮やかな紺碧^{べき}が視界いっぱいになり、深夕はその美しさに息を呑んだ。

(日本の空よりずっと青いんだ……。すごく綺麗)

夏空よりも濃い色に感動し、まばたきすら忘れて空を見つめる。すると、黒いものが点々とあるのに気付いた。

(星、じゃないよね。なんだろう、あれ)

星なら光り輝いているはずだが、空に浮かぶ点は光っていない。一体あれは何なのかと考えていたら、深夕の視線に気付いたかのように、その点がこちらに近づいてきた。

(え、嘘！ 待って、なんでこっちに来るのよ!?)

怖くなって後退^{おのりかき}するが、その間にも点はどんどん近づいてくる。

このままではぶつかる！ ぎゅっと目を閉じて悲鳴を上げそうになる前に、頭上で甲高い^{かんだか}声が響

き渡った。

「渡り人だ！ 渡り人が来たぞ！」

知らない言語と重なって、日本語が聞こえてくる。深夕は目をぼちりと開けて上空を見上げた。

(この翻訳機って、副音声を流してくれるんだ……)

イヤリングに触れながらそんなことを思った直後、深夕は絶句した。

(……鳥?)

視線の先では、黒く艶^{つや}やかな大鳥が羽ばたいていた。どうやら黒い点の正体はこの大鳥だったようで、深夕の周囲をバサバサと羽ばたきながら「渡り人！ 渡り人！」と繰り返す。

「渡り人がやってきたのを見たのは何十年ぶりだろう！ 今日には本当にいい日だ！ いい日だ！

乾杯しよう、乾杯！ お酒、ある？」

「あ、いや、ごめんね。お酒はないの」

早口でまくしたてられ、深夕はしどろもどろになりつつ答える。すると大鳥が「残念」としよげかえってしまったので、なんだか申し訳ない気持ちになった。

そこで深夕はあることに気付き、両頬に手を当てて後ろに下がる。

「と、とと、鳥が普通に喋ってる!？」

深夕の言葉をオウム返ししたのならともかく、大鳥はこの世界の言語らしきもので流暢^{りゅうたう}に話していた。びっくりする深夕を見て、大鳥は首を傾げる。今更？ とでも言うように。

「そ、そうだよ。ごめん、もっと早く驚くべきだったよね」

鴉からすみみたいに真つ黒な体の中でひとときわ目立つ金色くちばしの嘴くちばしから、呆れたような声が漏れる。それを聞き、深夕は思わず謝あやまってしまった。大鳥は満足したのか、「よし」と言い、深夕の周りをぐるぐると旋回する。

「渡り人の世界、クルーガーいない？」

不思議そうに訊きかれ、今度は深夕が首を傾げた。

「クルーガーって何？」

「チドリみたいな生き物のこと。頭がよくて、とつても偉い」

「チドリって、あなたの名前？」

「うん。チドリも頭がよくてとつても偉い。魔法を使って他の動物ともお喋りできる。人間はクルーガーが好き。クルーガーも人間が好き。だからクルーガーは人間ともお喋りする」

つまりクルーガーというのは、知能が高い生き物のことだろうか。いや、そんなことよりも——（門をくぐる前に下藤さんも魔力がどうか言いってたけど、この世界こで魔法が存在するのかな。……危ないんじゃないの？ それって）

強力な魔法で攻撃でもされようものなら、即死しかねない。ぶるりと身を震わせる深夕をよそに、チドリが空高く飛ばとびたいいく。「渡り人！ 渡り人！」と甲高かんたかい声こが降ふってきた。

「チドリは渡り人も好き。だから、渡り人に祝福を！」

そのまま、チドリは空に吸い込まれるように消えてしまい、急に静かになる。

深夕はキャリアバッグから、協会にもらった事前資料を取り出した。ざっと読み返したが、やっ

ぱりクルーガーのことは書かれていない。それほど調査が進んでいないということなのだろう。この資料を充実させる役目は、深夕が担になっているのである。

深夕は資料をキャリアバッグにしまい、改めて辺りを見渡す。

（ここがユリエテの、トゥーリ……）

ユリエテとはこの世界の名前で、トゥーリとは深夕が今いる町の名前だ。深夕の常識とはかけ離れた、未知の世界。

心もとない気持ちでいると、木陰から一人の人物が現れた。深夕の姿を認めて迷いなく近づいてくる。

「君がクラハシ・ミユウか」

緑のローブを身に纏まとった、ひよろりと背の高い男だ。深夕はこくこくと頷く。

門前の階段を下りると、柔らかな草地が広がっていた。先ほど走りすぎたせいか、足がガクガク震えていたが、なんとか草の上を歩いて男の前に立つ。

「はじめまして、渡り人の倉橋深夕です。これからよろしくお願いします」

深夕の声はイヤリングに吸い込まれ、向こうの言葉に変換されて出てくるようだった。チドリと話している時はそれどころではなかったが、今はどうにも違和感が強い。慣れるのに時間がかかりそうだ。

「異門管理協会トゥーリ支部長のアレッジだ。一応歓迎はしよう」

深夕は握手をするべく手を差し出した。だがアレッジは深夕の手を胡乱うろんげに一瞥いちべつした後、何事も

なかったかのように背を向けた。ローブについたフードで頭がすっぽりと覆われているので表情はわからなかったが、声からはとても冷淡な印象を受ける。

(感じ悪い人だなあ。……でも、握手の文化がないだけなのかも)

深夕は手を引つ込め、さっさと歩き始めたアレッジに続く。そのまま歩いていくと、やがて木々の向こうに石造りの建物が見えた。

「あれがトゥーリ支部だ。君にとっては今と、元の世界に帰る時以外、用のない場所だがな」

「えっ？ 滞在中に連絡を取り合ったりとかはしないんですか？」

「しない。むしろ一切の連絡を禁じる」

冷やかに答え、アレッジがこちらを振り向いた。

「今のうちに忠告しておく。ミュウ、君は自分が渡り人であることと協会員であることを、町の住民に決して悟らせないように。民間人は異世界が存在することすら知らないが、用心するに越したことはない」

異世界人であることを隠せとは言われていたが、協会員であることすら悟らせるなどは、どういうことだろうか。

「協会員って知られたら、都合の悪いことでもあるんですか？」

「町で暮らしていれば、すぐにわかる」

アレッジはそっけなく答えた。

だが、深夕は納得がいかない。協会員という身分を隠さねばならないのなら、自分はどういう立

場で生活すればいいのか。そんな深夕の困惑が伝わったのか、アレッジが背中を向けたまま告げる。

「君が住み込みで働くことになっている雑貨屋の主人は、老齢の女性だ。君は遙か西の国レストローテから彼女の手伝いをしにやってきた孫娘ということにしておけばいい」

(レストローテ？ こっちの世界にある国なのかな)

偽装のために使う国名なのだから、実在しているのだろう。そう思っただけで、国名をしっかりと心に刻んでいる間に、深夕たちは支部に到着した。

中に入ると、白い石で作られたカウンターテーブルの奥に、端正な顔立ちの男が立っていた。

「ベル、あれを出せ」

アレッジは男にそう告げ、一着のローブを受け取る。それを深夕に渡してきた。

「これを着ておけ。その格好では目立つ」

言われてみれば、日本にいた時と同じ服装のままだったと気付き、深夕は素直にローブを羽織る。サイズもぴったりで着心地がいい。くるりと一周してみると、まるで魔法使いにでもなった気分である。それはデザインこそ異なるものの、アレッジのものと同じだった。

アレッジはしばらく深夕の様子を眺めていたが、ふと問いかけてくる。

「体調に変化はないか？」

「はい、いたって健康です。具合も悪くありませんし」

だがアレッジは納得がいかないようで、フードを取ってまじまじと見つめてきた。

フードに隠れていた彼の顔が、ようやく露わになる。長い金髪が緩やかに束ねられており、紺碧

の瞳は驚くほど冷ややかだ。まだ三十歳そこそこに見えるのに、どんな生活を送ってきたらこんな冷たい目になるのか。やや青白いその顔を見ながら、深夕はそんなことを考える。

「渡り人には魔力が宿るといふ。門をくぐる時、光に支配されただろう？」

「たくさんの光が体を通り抜けていきましたけど、支配されてはいないと思います」

光が体を通り抜けると、その場所が熱くなったのを思い出す。あれが魔力が宿るといふことなら、自分もチドリみたいに魔法が使えるようになったのだろうか。

(特にそういう感じはしないけど。腕を振ったって何も出てこないだろうし)

魔力について、下藤は教えてくれなかった。アレッジに質問するのは怖い、他に訊ける相手はいない。だから深夕は意を決して尋ねてみた。

「もし魔力が宿ったら、何か体に変化があるんでしょうか。というか、そもそも魔力って……」

まさか魔力のことを知らないとは思わなかったのか、アレッジが怪訝そうに眉根を寄せる。

「二ホンの支部は、そんな大事なことも教えずに渡り人を送り出したのか」

「すみません……」

深夕が悪いわけではないのだが、思わず謝ってしまう。すると、アレッジは気持ちを落ち着かせるように一つ息をついた。

「魔力は目で見ることでできないが、世界を満たす強大な力だ。あらゆるものを生み出し、破壊することができる。その力の一端を、渡り人は世界を渡る時に得るといふ。だが、その魔力で何ができるのかは、個々人で違っている。それは、実際に力を使ってみるまでわからない」

そこでアレッジが眼光を鋭くし、深夕を見据える。

「かつてはこの世界の人間にも扱えたと言われているが、失われて久しい力だ。専門の学者でもない限り、魔力に関する知識もない。だが迂闊に知られては困る。クラハシ・ミュウ。君は力を発現しても、それを決して他者に知られてはならない」

渡り人だけが持つ特別な力。それは下手に知られれば、ユリエテの人々に混乱をもたらすことになる——そう言いたいのだろうと深夕は推測した。

もう話は終わったのか、アレッジが再びフードを被り、カウンターテーブルの奥の男に声を掛ける。

「おい、ベル——ベルディード。彼女を滞在先まで案内しろ」

「わかりました」

アレッジのぞんざいな物言いにも動じず、ベルディードと呼ばれた男が微笑む。彼が深夕に近づいてくると入れ違いに、アレッジは奥のドアへ向かって歩いていく。

その背に深夕は慌てて声を掛けた。

「あつ、あの、渡り人について、もっと色々聞かせてもらいたいですけど……」

まだ知らないことが山ほどあるのだ。聞けることは今のうちに聞いておきたい。だがアレッジは「自分で学べ」とそっけなく言ひ、そのままドアの向こうに消えてしまった。

自分で学べというなら、そうするしかない。元々、それが仕事だ。己に活を入れ、深夕はベルディードに頭を下げた。

「すみませんが、滞在先まで案内をよろしく願います」

その姿を見たベルデイドは一瞬黙り込んでから、紫のローブを翻し、踵を返す。

「申し訳ありませんが、少し外でお待ちください。僕は支部長に確認したいことがありますので」

「え？ はい、わかりました」

アレツジを追いかける彼を不思議に思いながらも、深夕は言われるまま外に出る。そしてうらかな日差しの下で、ベルデイドが戻ってくるのを待った。



「お待ちください、アレツジ支部長」

長い廊下を駆けてくるベルデイドの声に、アレツジは足を止めた。振り向くと、ベルデイドがにこにこ微笑みながら、速度を落としてこちらに近づいてくる。

「客人が来るのをあんなに楽しみにしていたのに、もうお別れしてしまっていていいんですか？」

「……そんなくだらないことを聞くために、渡り人を置いて戻ってきたのか」

アレツジは彼を咎めて視線を鋭くした。だがベルデイドは一步も引かず、なおも言う。

「その渡り人を冷たくあしらった支部長には言われたくありません。支部長のお人柄をよく知っている私には照れ隠しだっただけですけれど、初対面のミュウ殿には伝わりませんよ」

「照れ隠しじゃない。他に話すこともなかったからだ」

「ありますよ。ミュウ殿に頼られて実は嬉しいこととか、緑のローブは本来協会の支部長しか着られないっていうこととか、それをプレゼントしてしまうくらい熱烈に歓迎していることとか。……それに、支部長の目つきと顔色が悪いのは徹夜したからだっただけです」

審めるように言うベルデイドに背を向け、アレツジは再び廊下を歩き始める。そのまま支部長室に入り、机に積み上げられた書類を一枚取りつつ、そっけなく答えた。

「徹夜したのは仕事があったからだ。彼女は関係ない」

見ればわかるだろう、という風に書類を見せつけるアレツジ。だが、ベルデイドに一笑されてしまった。

「それらの書類はすべて今朝以降に溜まったものです。渡り人がやってくるのが楽しみです、眠れなかったんでしょう？ おまけに今日は朝から、仕事が全然手につかなかったよう」

穏やかな笑顔をしているくせに、その口から放たれる言葉は辛辣だ。アレツジが渋面を作ると、ベルデイドはこれみよがしにため息をついた。

「体調に変化がないか尋ねたのも、協会員だと周囲に知られないよう忠告したのも、すべてミュウ殿を気遣ったこと。なのに、彼女にまったく伝わってません。これは由々しき事態です」

「もういいからさっさと行け！ これ以上客人を待たせるな！」

凶星をつかれたアレツジは、苛立ちまぎれに強く机を叩く。まるで癩癩を起した子どものようだ。机を叩いた手のひらの痛みでそのことに気付き、アレツジは舌打ちする。

「……彼女のためにも、協会とは親しくしない方がいい。トゥーリに馴染むためにはな」

アレッジとて、異世界からやってきた客人を歓迎したい気持ちはある。ベルデイドの言う通り、自分と同じ色のローブを渡したのもそのためだ。だが、それを深夕に伝える気はない。あまりに頼りない彼女に、あれこれ教えてやりたかったのだが、それも我慢した。

「彼女が安易に協会に足を運ぼうなどと思わないよう、初対面の印象は悪いぐらいでちょうどいい。お前も彼女に余計なことを喋るな。これは命令だ」

アレッジが厳しく命じると、ベルデイドはため息をついた後、先ほどと同じ微笑を浮かべた。
「仰せのとおりに」



深夕は戻ってきたベルデイドに促されて、小さな三輪馬車に乗り込んだ。日本のタクシーに比べて乗り心地はだいぶ悪かったが、馬車に乗ったのは初めてなので、好奇心が先に立つ。

馬車のカーテンをわずかに開けて、深夕は過ぎ去っていく景色を眺めた。

森を切り開いて作ったのか、町が森に囲まれているのがわかる。簡単に舗装された道の脇には樹木が植えられており、木造の家々によく合っていた。家々はさながら、ログハウスを思わせる佇まいだ。

(あの木にも石にも、全部私が知らない名前がついてるんだろうなあ)

好奇心を隠さずキョロキョロしている深夕に、御者台に座るベルデイドが楽しげに説明した。

「このトゥーリは、ダノン王国の辺境に位置する町です。王都のような都会に比べると物寂しいですが、住み慣れれば意外といいものですよ」

「へえ……都会へ行くには結構時間がかかるんですか？」

「王都に行くとなると、丸一日はかかるでしょうね。ちなみに空を通って行くんですよ」

空を通ってということとは、飛行機でも使うのだろうか。そんな技術があるとは思えないのに……と不思議に思いながら空を見ていた深夕は、目を瞬かせる。

上空には、大小様々な影が浮かんでいた。太陽の光が強いからか、くつきりとしている。

「空に浮かんでいるあの影は、なんなんですか？」

「浮島ですよ。私たちのいるトゥーリもそのうちのひとつです」

えっ？ と深夕は思わず声を漏らした。

「ここ、浮かんでたんですか!？」

言われてみれば足元はひどく揺れているが、それは馬車に乗っているせいだ。歩いている時には揺れなど感じなかったもので、言われなければ、ここが浮島であると気付かなかっただろう。

どうやら、思った以上に地球と違う点が多いらしい。

これからの生活を好奇心半分恐ろしさ半分で思い描いていたら、馬車の速度が緩やかになった。家々が立ち並ぶ中に、馬車が入っていく。やがて大きな焦げ茶の建物の前で馬車が停まった。ベルデイドが先に降り、馬車のドアを開けてくれる。

「よい旅を。……それとアレッジ支部長のこと、あまり誤解しないであげてくださいね」

「え？ は、はい。努力します」

真剣な顔で告げられ、よくわからないまま返答する。ベルデイドはまだ何か言いたそうな顔をしていたが、結局何も言わずに御者台ぎよしゃだいに戻っていった。

鞭むちの音と馬の嘶いななきが聞こえたかと思うと、馬車が遠のいていく。その後ろ姿を見送ってから、深夕は周囲をぐるりと見回した。

（なんだか視線を感じる。こつち？ それともあつちかな）

深夕が目を向けると、その方角からは視線を感じなくなる。だが、目を離すと、また感じられた。気味が悪いと思いつながら、焦げ茶色の建物に近づく。馬車が停まったということは、ここが例の雑貨屋なのだろう。こちらからは、嫌な視線を感じなかった。

「ごめんください」

ドアノブに手をかけ、きい、と音を立ててゆっくりと開く。ドアの隙間すまから中を覗き込むと、暗がりに誰かがうずくまっていた。

「あいたた……」

老女らしき人の声を聞き、深夕は勢いよくドアを開けて人影に駆け寄る。

「おばあちゃん、大丈夫!？」

「なんだい、あんたは」

そう問い返されたものの、それどころではないと、深夕は老女が手で押さえている腰こしの部分ぶぶんを擦する。

「腰が痛いのか？ 湿布しつぷ貼った方がいいんじゃないよ！」

「人を年寄り扱いするんじゃないよ！」

顔を覗き込もうとしたら、何か軽いもので頭を叩かれてしまった。老女の手を見ると、大きな扇子せん——いや、ハリセンが握にぎられている。

（ハリセンって、この世界にもあるんだ……って、そうじゃなくて!）

今はそれよりも、老女の横暴よこたうぶりに文句を言うべきだろう。いきなり頭を叩くなんて何事かと。

深夕は頬を膨ふらませて抗議した。

「年寄り扱いするなって言われても、十分お年寄りじゃない!」

そう言つて、今度こそ老女の顔を覗き込む。

黒いローブを着た老女は、皺しわが多く刻まれた褐色かっしよの肌くみに、真紅しんくの瞳ひとみをしていた。かつては金髪きんぱだったのであろう、ところどころに金髪きんぱのまじった白髪はくぱが、一つにまとめて結び上げられている。

深夕の祖母と言つてもいいぐらいの年齢に見えた。

老女は鷹たかのように鋭い瞳ひとみで、深夕を睨にらめつけている。

「大体、湿布しつぷってなんだい湿布しつぷって。あんた、自分の世界の文明を知られちゃいけないって、口を酸すっぱくして言われてるんじゃないのかい!？」

厳しい声で言われ、反射的に背筋を伸ばしながら、深夕は「あつ」と声を上げる。

「そうだった!」

早速自分の世界のことを口にしてしまい、慌あわてる深夕。だが、そこではたと気付く。



「おばあちゃん、私が違う世界の人間だって知ってるの？」

そう聞くと、老女が盛大にため息をついた。

「……おまけに鈍いときた。アレッジも、なんでこんなの寄越したんだか」

「アレッジ？ それって協会の支部長さんだよ。じゃあ、おばあちゃんが雑貨屋のご主人——いたっ！ ちよ、ちよっと痛い！」

「わかったんなら、気安い口利くんじゃないよ！」

顔を輝かせて老女に飛びつこうとしたら、またハリセンで頭を叩かれてしまった。薄っぺらい素材なのでほとんど痛くないのだが、音が派手なせいですい悲鳴を上げてしまう。

老女はハリセンを持っていない方の手で腰を一擦りした。

「怒鳴ったら疲れちまった。ただでさえ、喋るだけで腰にくるつてのに」

「じゃあ怒鳴らなければいいじゃない」

「誰が怒鳴らせてるんだい！」

指摘したらまた怒鳴られてしまったので、深夕は思わずキャリアバッグを盾にして後ろに下がる。

「……ところで私、おばあちゃんのお名前聞いてません」

少し口調を改め恐る恐る訊いてみると、鼻で笑われてしまった。

「来て早々人を年寄り扱いした挙句、挨拶もろくにできない小娘に言われたくないね」

深夕は、ぐっと言葉に詰まる。そういえば、まだ挨拶はしていなかった。キャリアバッグの前に進み出て、頭を下げる。

「……ご挨拶が遅れてすみませんでした。倉橋深夕です。今日からどうぞよろしくお願いします」
丁寧に挨拶すると、老女は視線をわずかに和らげた。

「ラダ・ペスタリアだ。おばあちゃんなんて呼ぶのはやめとくれ」

「え？ でも、私のおばあちゃんつてことになるんですよね？ アレッジさんはそう言っていましたよ。私はレストローテ？ つていうところから来た、ラダさんの孫娘つて設定らしいです」

（見た目は全然違うけど）

だが、あくまで祖母と孫娘を演じていれば、面と向かって指摘する人もいないだろう。

ラダはまだ納得のいかない顔をしていたが、やがて諦めたのか、体から力を抜いた。腰の痛みも落ち着いたようで、ゆっくり姿勢を正して奥へと歩いていく。

「雑貨屋の中を案内するから、ちゃんとついてくるんだよ」

「うん」

（よかった、無事に受け入れてもらえそう）

そう思い、にっこり笑って頷くと、ラダが鬼のような形相でぐるりとこちらを振り向いた。ハリセンで机を叩く甲高い音が響く。

「返事は『はい』だ！」

「は、はいっ！」

深夕が気をつけの姿勢で返事をする、それに満足したのか、ラダは前に向き直り、無言で歩いていく。その背を追い、深夕は胸中でため息をついた。

（なんだか怖そうな人だなあ）

来て早々怒られっぱなしだ。もともと、悪いのは自分なのだが。

落ち込みつつ辺りを窺うと、壁際に商品棚がずらりと並べられていた。

（ネットレスやブレスレットはわかるけど、他のは全然わからないや）

店内に置かれたテーブルの上にも謎の球体や空き瓶が置かれているが、深夕の目にはガラクタにしか見えない。傍には小さなプレートがあるものの、何と書いてあるのかはわからなかった。

歩きながら、ラダが説明してくれる。

「この家は二階建てになっていて、地下と一階に分かれている。地下は店の在庫を仕舞っておく倉庫で、一階は店舗と居住スペースだ。店舗と居住スペースを区切っているのは——」

そこまで説明したところで一旦口を閉じ、立ち止まる。そうして、前方で深夕たちを待ち構えているドアを指さした。

「このドアだ。ドアの鍵はあなたにも渡すが、他の人間を入れるんじゃないよ」

「はい。……変わった形のドアですね」

目の前にあるのは、上部が半円状になっている小さなドアだった。ドアノブには飾り細工が施されており、可愛らしい雰囲気である。

ラダが襟元からネットレスのようにぶら下げていた鍵を取り出し、ドアを開ける。その鍵は深夕の家の鍵よりも二回りは大きく、つややかな白い石で作られていた。

ドアの向こうは通路が左右に分かれており、ラダは右側に進んでいく。

細い廊下には三つの扉があり、その一番奥の扉を開けて、ラダが手招きしてきた。

「あなたが生活するのはこの部屋だ。必要な物があれば買ってきて、好きに使うといい」

そう言われ、ドキドキしながら中に入った深夕は「わあっ」と歓声を上げた。

「すごい、とっても広い部屋ですね！」

案内された部屋は、ゆうに十畳以上の広さがあった。ベッドに机、衣装棚といった家具が置いてあるのに、まだ広々としている。

大家族だからと諦めていたが、実は一人部屋に憧れていたのだ。その夢が、こんな形で叶うとは。「この部屋の手前にあったドアは、風呂とトイレだ。家の裏手に井戸があるから、洗濯はそこでするように。それと時間だが……あの時計が見えるかい？」

ラダが衣装棚の斜め上をすいと指さした。そこには丸くてカラフルな時計が掛けられている。形は地球のものと似ているが、針は一つしかない。

「一日は二十七時間に分かれている。文字盤の色が赤い時間帯は勤務時間、それ以外の時間帯は自由時間だ。今は春時間だが、季節が変われば赤い色の位置も変わるから注意するように」

「季節によって勤務時間が変わるんですか？」

「日の出と日の入りが違えば、それだけ生活の仕方も変わるだろう？」

（ヨーロッパにある、サマータイムみたいなものかな）

深夕がそんなことを考えていると、ラダがポケットから小さな木の板を取り出した。見れば何やら円グラフのようなものが描かれている。

「一年は七つの月に区切られている。太陽が沈まずにずっと明るい月が一つ、逆に太陽が出てこなくて真っ暗な月が三つ、常に夕暮れのように地平線で燃えている月が一つ、そして朝になると出てきて夜になると沈んでいく月が二つで、合計七つだ」

円グラフをなぞるラダの指先を眺めながら、深夕は考える。

（白夜と極夜は地球にもあるけど、夕暮れがずっと続くってどんな感じなんだろう）

ラダによれば、一年は極夜の時期から始まり、春がきた後、黄昏の時期がくるという。それはこの世界の夏にあたる白夜の時期を経て秋になり、やがてまた極夜の時期を迎えて一年が終わるらしい。

「——という具合になっている。後のことは自分で調べていくんだね。そのための渡り人だろう」

「はい、ありがとうございます！」

覚えるには覚えたが、レポート作成のためにもメモを取っておこうと決意したところで、ラダが部屋を出ていこうとする。

「仕事は明日からにする。今日はひとまずご近所さんに挨拶しに行つて、それから休みな」

パタンと扉が閉まる。広い部屋に一人取り残された深夕は、腕を組んで唸った。

「ご近所さんへの挨拶？」

言われてみれば、引越しは引越しなのだから、ラダの言い分はもつともだ。だが、この世界の習慣を知らないのです、どうしたらいいのかわからない。

（日本の場合、引越しの挨拶をする時の定番といえば……）

深夕はあることを思いつき、駆け足で雑貨屋の店舗に戻って勢いよくドアを開けた。

「おばあちゃん、この世界ってお蕎麦ある?! ……えっと、お蕎麦っていうのは黒つぶくて細長い食べ物なんだけど——」

「さっぱり伝わらない説明だね……。何にせよ、あなたの世界の食べ物があるわけないだろう。馬鹿かい、あなたは。あと、気安く口を利く^まなって言ったはずだよ」

深夕が突拍子もないことを言い出すのに、ラダは早くも慣れたようで、振り向きもせず^まに即答した。

「でも私の世界では、引越しの時は近所にお蕎麦を配るのが定番だし……」

「なんだ、そんなことかい。手ぶらで構わないよ、ただし、年寄りには注意しな」

「年寄りって言ったら、おばあちゃんだって——いえ、なんでもありません、行ってきます」

(今、般若^{はんにゃ}みたいな顔が見えた……あれ絶対怒ってるよね)

一瞬こちらを振り向いたラダの顔。そのあまりの恐ろしさに、深夕は咄嗟^{とつさ}に顔を貼り付け、急いで雑貨屋を出ていく。

雑貨屋の周囲には、ぼつりぼつりと民家が立っている。深夕はそのうち、雑貨屋に近い三軒に目星をつけた。攻めるなら、まずは隣近所からだろう。

一度立ち止まり、木の陰に隠れて深呼吸する。それから小声で挨拶の練習を試みた。

「はじめまして、突然お邪魔してすみません。私、雑貨屋のラダの孫で深夕といます。引越しのご挨拶に来ました」

風が吹き抜け、木の葉が揺れる。笑っているようにも聞こえるその音に不安を覚え、自分を安心させるために大丈夫と繰り返す。

「大丈夫、大丈夫。渡り人ってバレそうな言葉は使つてないし」

きちんと挨拶をすることも大切だが、異世界の人間だとバレないようにすることが何より重要だ。誓約^{せいやく}を破つてクビにでもなったら、深夕にとってはこの世の終わりと行ってもいい。

練習を繰り返し、緊張がほぐれてきたところで、勇気を出して一軒目の家に向かう。ちんまりとした、可愛らしい雰囲気の家だ。こういうところに住んでいる人なら、優しいに違いない。

(よかった、ここなら大丈夫そう)

丸みのあるドアの前には一段ほどの階段があり、その手すりにはベルが置いてある。インターフォン代わりだろうと手にとった深夕は、それをチリンと鳴らした。

「すみませーん」

呼んでみると、ドアの向こう側から小走りに近づいてくる誰かの足音が聞こえる。足音の主はドアの前で立ち止まり、少しの間を置いてドアノブを捻^{ひね}った。

ドアの隙間から、中年の女が姿を見せる。

「あ、はじめまし——」

「帰んな」

相手は深夕の顔を見るなりドスの利いた声でそう言い、勢いよくドアを閉めてしまった。

「え? え? 嘘」

何か失礼なことをしてしまったのだろうか。いや、そんなことはないはずだ。虫の居所が悪かったのかもしれないと、無理やりポジティブに考える。

(とりあえず、この家は後回し。何回も呼び出したら余計に関係が悪化しそうだし)

そう思い直し、深夕は他の家に行ってみることにした。だが――
「帰ってください」

「うちは挨拶なんて結構」

残りの二軒からも門前払いを食らい、ご近所への挨拶回りは早々に頓挫してしまった。

(な、なんなのこの人たち。すっごくムカつくんだけど！)

挨拶ぐらいさせてくれてもいいじゃないか。押し売り営業をするわけでもないのだから。

腹が立ったものの、自分一人が我慢すれば済むことだと思い、深夕はぐつと堪えた。とはいえ、これ以上拒絶されたら心が折れそうなので、ひとまず雑貨屋に戻ることにする。

「――それで、一軒も挨拶できなかったのかい」

呆れるラダに、深夕は店のテーブルにぐったりとうつ伏せながら頷いた。

「全然取り合ってくれないですもん」

「そりゃ、行った家が悪かったね。三軒とも、住んでるのはよそ者嫌いの代表格だ。偏屈な年寄りならともかく、若くしてあれなんだから先が思いやられる。町の人間には親切なだけだね」

ラダも彼らのよそ者嫌いぶりには辟易しているらしく、疲れたように言って立ち上がった。

「まあいい。食事にするよ」

そのまま店舗の奥に引っ込んでしまったので、深夕は慌ててついていく。

ラダは左右に分かれた通路を、今度は左側に進んだ。そうして二つある扉のうちの手前側に入ると、深夕の部屋よりも大きな空間が広がっている。

「ここが台所兼食堂だ。いづれあなたにも料理を手伝ってもらおうからね」

部屋の中央にはテーブルが一卓置いてあり、カラフルなテーブルクロスが敷かれていた。真っ白な食器が並び、野菜やスープがたっぷりと盛られている。そのどれもが、やけに赤い。

「なんだか、とても辛そうですね」

サラダに入っている赤い輪切りの野菜は、唐辛子を大きくした感じだ。いかにも辛そうだと怯えていたら、ラダが真っ黒いお粥のようなものを椀に注ぎながら「辛くはないよ」と言った。

「あなたの世界では、赤は辛いものの象徴かもしれないが、こちらでは辛いものといえば紫だ。辛いのが苦手なら、紫の食べ物には気をつけることだね」

紫の食べ物というと茄子ぐらいいしか想像できない深夕だったが、注意しておくに越したことはないと思っ肝に銘じる。それから赤と黒に彩られた食卓をもう一度眺め、椅子に座った。

お祈りをすることも両手を合わせることもなく、ラダは料理を食べ始める。その姿にならい、深夕も無言で木のスプーンを手に取り、スープを一口飲んでみた。

(あ、本当に辛くない。こんなに真っ赤なのに、むしろ甘いぐらいだ)

野菜をすり下ろしてあるのか、繊維のようなものが舌に触れる。いくつもの香辛料が使われているらしいが、野菜の味がよく引き立てられ、後味が甘い。

見た目のイメージと違いすぎて、不思議な気持ちになる。今まで食べたどの料理にもたとえられない味だった。

「変わった味……」

「材料もスパイスも違えば、あんたが知らない味になるのは当然だ」

そう言われて納得しつつ、深夕はしみじみと呟いていた。

「……私、本当に異世界に来ちゃったんだ」

「何を今更」

「浮島うきしまを見たり知らない言葉を聞いたりするよりも、ご飯を食べた時の方が異世界を実感できるんだね」

これからもっとたくさんの驚きに出会うことだろう。だが、喜びは感じなかった。今はただ、馴染んだ味の料理を食べられないのが寂しい。

「この料理、とっても美味しい」

あまり故郷を懐かしんではラダに失礼だと思い、そう付け足す。そこで自分の口調が砕けているのに気付いたが、ラダは「そうかい」と言っただけで、ハリセンで攻撃してくることもなかった。

食事を終え、後片付けを手伝ったり風呂に入ったりしていたら、夜もすっかり更けてしまった。

壁掛け時計の針が二十五時を告げている。恐らく地球の感覚で言えば二十三時頃だろう。もういい時間だと思いつつ部屋に入り、はあっと息を吐き出す。

「疲れたー」

見知らぬ物が多すぎて、食器を洗うのも風呂に入るのも一苦勞だった。洗面所に置いてあった瓶をシャンプーだと思ったら、まさか歯磨き粉だったとは。

深夕はベッドに向かい、傍そばに置いてあったキャリーバッグの中を探る。そこから取り出したのは写真立てだ。中には家族の集合写真が入っている。

これがここで働く理由だと、心の中で自分に言い聞かせる。写真の中で、母親と有紀が心配そうな顔をしているように見えたので、深夕は笑って「大丈夫だよ」と告げた。

「アレッジさんやラダさんは恐そうだし、ご近所さんは腹が立つけど、月給五十万円——いや、実質七十万円だもん」

こちらの世界で二年間頑張り抜けば、もう立派なお金持ちだ。しっかりとしなければと気を引き締め、深夕は写真立てを衣装棚の中に入れた。

「おやすみなさい」

写真の中の家族に言い、衣装棚の扉を閉める。そうしてランプを手にベッドへ向かい、ランプの火を吹き消した。防犯のためなのか、部屋には窓が一つもなく、火が消えると一気に暗くなった。

真っ白なベッドシートの上に寝転がる。滑らかな手触りのシートは、シルクでも綿でもない。これが何でできているのか、そのうちラダに聞いてみよう。

(明日から二年間、しっかりと頑張ろう。お金をたくさん貯めて、弟たちが自分の夢を叶えられるように)

目を閉じると、家族の顔が思い出される。たった一日しか離れていないのに、懐かしさに笑みを